

## 知的障害者から見た地域生活：

### フォトボイス「くらしをパチリ調査」による人・場所とのつながり

笠原 千絵（社会福祉学科教授）

要約：本研究ではサービス受益者であり住民である知的障害者の立場から地域生活とインクルージョンの現状を検証するため、知的障害者とフォトボイス調査を行った。その結果、知的障害者のよく行く場所には、地域への愛着や誇り、自分の好みの反映、落ち着きや心の支え、存在と貢献など様々な意味があった。知的障害のある友人とのつながりが日々の安定した暮らしにつながり、職場の人との関係は差別やいじめはないものの肯定的ともいえず、近隣とのつながりは少なく、街中では職務として関わる人の出会いがあった。場所、人とのつながりには、情報と情報を得るためのサポート、安全な移動手段、自分を知っている人や困ったときに頼れる人や場所、出会いの機会と条件が影響していることが明らかになった。当事者とともにインクルーシブ社会の実現を目指すには、「地域に根差す人としての理解」「当事者の観点からの課題の相対化」「多様な人々との出会いを通して関係をつくる機会」が鍵となりうる。

キーワード：知的障害、地域生活、インクルージョン、フォトボイス化

わかりやすい版：

- ・ 誰にでも、地域で自分らしく暮らす権利があります。でも、知的障害のある人にとって、「地域」はどのようなものか、よくわかりませんでした。そこで、近所でよく行く場所や、よく会う人の写真をとって、みんなで話し合う「くらしをパチリ調査」をしました。その結果、次のことがわかりました。
- (1)よく行く場所には、①地元好きな場所や誇りに思う場所、②自分の好きなことができる場所、③落ち着ける場所、④自分が認められ、人のために何かできる場所、の4つがありました。
- (2)よく会う人とのつながりには、①会々と安心する同じ障害のある仲間、②仲が良くもわるくも無い職場の人、③つながりが薄い近所の人、④外出先で会う店員など、の4つがありました。
- (3)場所や人とのつながりの多い・少ないには、次の4つのある・なしが関係していました。それは、①情報と連絡の方法、②安全でわかりやすい移動の方法、③何かあったときに頼れる人や場所、④人に出会う機会です。
- ・ 知的障害のある人から見た地域には、いい点もわるい点もありました。どんな人も暮らしやすい地域にするためには、障害のある人の意見が大事です。

## 1 研究背景と視点

### 1.1 研究の背景

日本政府は2022年に国連障害者委員会による審査を受け、総括所見では第19条「自立した生活及び地域社会への包容」(インクルージョン)に関して厳しい勧告を受けた。第19条は障害者が地域社会で生活する権利を規定し、締約国にはその措置として、障害者が生活様式を選択機会を有し特定の生活施設で生活する義務を負わないこと、インクルージョンを促進し孤立と隔離を防ぐために必要なサービスへのアクセス保障、障害者のニーズに対応している一般住民向けのサービスや設備の確保を求める。また総括所見では多数の項目で日本政府に対し障害者団体との緊密な協議を求め、一般原則及び義務に関する箇所では特に、知的障害者及び精神障害者を代表する団体との緊密な協議の必要性について触れている。ノーマライゼーション理念のもと、障害者の社会参加と地域生活を進める形で展開してきた日本の障害者福祉も、権利という観点からは課題が多く、真の意味でインクルーシブな取り組みとするには、障害者、障害者団体が参画する仕組のもとに進める必要がある。

一方、障害者福祉の領域に限らず、日本では生活困窮者支援や地域福祉の文脈で社会的排除とインクルージョンが論じられ、地域共生社会として政策化されている。2019(令和元)年の地域共生社会推進検討会最終とりまとめが示す『支える側』『支えられる側』という従来の関係を超えて、人と人、人と社会がつながり、「一人ひとりが生きがいや役割を持ち、助け合いながら暮らしていくことのできる」包括的な地域や社会とは、一見障害者福祉の領域でいうインクルージョンと共通しているようである。しかし地域共生政策には批判も多く、茨木(2019)は、地域で生きる障害者や高齢者の位置づけ、社会的抑圧に関する省察が欠けると批判的に評価し、マイノリティと言われる人が地域社会で孤立する理由、その人たちが求める地域生活、その実現に向けた国の政策転換などの視点で考える必要があると問題提起する。

このような状況の中、支援対象とされることで住民としての側面が見過されがちな知的障害のある人たちは、地域での暮らしをどのようにとらえているのだろうか。また、保護者や支援者による代弁が中心で当事者の組織化が進まない中、本人たちの見解を理解するにはどのような方法を使えばいいのだろうか。本研究はノーマライゼーション、インクルージョン、共生といった地域生活を指向する障害者福祉がもたらした地域生活を、サービス受益者であり住民である障害者の立場から検証することを目的とする。中でも、排除を受けやすい知的障害者による地域の認識、就労に限定されない社会との関わりや、つながり方に焦点をあてる。リサーチクエスションは、知的障害者から見た地域における場所とのつながり、人とのつながり、場所や人とのつながりに影響を与えることの3点を明らかにすることである。

### 1.2 日本における先行研究

知的障害者の地域生活に関し、ノーマライゼーション理念に基づく脱施設化と地域移行の評価については、鈴木良による体系的な研究がある。まず欧米での脱施設化の評価視点は、当

初の「適応行動」や「行動障害」から、1980年代には「生活の質」、1990年代には生活の質の中でも「自己決定」に変化したものの、専門家や研究者による「ノーマル」の分析/診断は、個人的生活環境をめぐる多様で豊かな意味の矮小化に、機能主義的な理論的視座は、現実社会にある葛藤や対立、不平等な社会状況や権力関係の軽視につながった(鈴木2010:22-36)。そのため日本では当初より生活の質と環境の側面に焦点化し、本人の満足感を評価する研究が行われた。知的障害ゆえの調査上の問題、重度知的障害者の存在などを鑑みると、客観的評価が重要であるが、同時に本人の主観的解釈から「ノーマル」の意味を問い直すことが重要である(鈴木2013)。こうした状況をふまえ、コロニーからの地域移行を経験した知的障害者へのインタビューでは、地域移行後もコロニーと同様の生活と、居住場所に応じた職員からの自由の制約により「無力化の過程」が生じ、「特権体系」が再編成されることを明らかにした(鈴木2009)。

地域生活に必要なサービスや支援体制に関して、支援者や保護者を対象とする研究の蓄積が進む中、近年知的障害者本人を調査回答者とする研究が散見されるようになった。調査法にも着目すると、特別支援学校卒業後の生活実態については、進路である職場や余暇活動の現状に焦点をあてたアンケート調査(武蔵・水内 2009)、およびインタビュー調査(野波・三木2020)がある。また親元からの自立については、比較的小人数を対象とした研究として、インタビューによる「老障介護家庭」における自立の経験(福田 2018)、単一事例研究による親元からの一人暮らしにおける母と娘の内的変容(下尾2020)、インタビューをライフストーリーとして構成した地域生活の経験(青木2014)などがある。田中美恵子と望月隆之が実施した「知的障害者40人の『人生の岐路における選択』」(日本財団2023)は、当事者活動を支援している社会福祉法人を通じて、40人の知的障害者にインタビューを行った。アクションリサーチ的な要素を含むものとして、中高生の知的障害児と取り組んだ自立生活プログラムの開発(鳥海2017)、インクルーシブリサーチによる「しょうらいの暮らし調査」(笠原2020)がある。これらの研究は、地域生活の自立の側面に焦点をあて、身体障害者と異なり知的障害者の場合特に必要となる意思決定や自己決定について、当事者の経験から課題や必要な支援を明らかにするものである。

一方、成人の知的障害者のインクルージョンに関する研究は多くはなく、概説や上述した脱施設に関するもの、また地域における活動紹介が中心である。そのような中、西村愛は、居場所づくりの実践を通じた関係性の変容、とりわけ健常者の変化(西村2008)、居場所の閉鎖性という特質を打破するためのソーシャルワーク(西村2011)という観点からインクルージョンを論じている。

### 1.3 インクルーシブリサーチを用いた先行研究

多義的なインクルージョンについての知的障害者の経験や認識を理解するため、本人たちと行うインクルーシブリサーチでは、「場所」と「belong」をテーマにする研究が行われてい

る。いずれにも共通するのは、社会的に支配的な価値やライフスタイルを促進するインクルージョンのモラル的判断という側面が、これらの目標に達しない人の排除につながるという認識である。イギリスでは1997年に誕生した労働党政権がソーシャルインクルージョンを政策理念に掲げ、2001年に保健省が出した白書 *Valuing People* では、「社会的に最も排除されている」知的障害者に対し、権利、自立、選択、そしてインクルージョンを原則とした戦略を定めた。しかし Hall(2010)によれば、インクルージョン政策により、有給雇用や一人暮らしといった「普通」の社会活動が期待されたものの、就労経験の乏しさ、一人暮らしで経験した孤立や虐待、複雑な福祉手当制度、適切な支援の不足など、実際には肯定的な経験とは言い難く、当事者にとってのインクルージョンの新たなあり方が模索されるようになった(Hall2010)。

まず、健常者との交流や主流の空間への利用と参加がインクルージョンにつながるという仮定への批判から、インクルージョンの「場所」をより具体的、限定的にとらえる研究である。排除/包摂を空間的にとらえる人文地理学と、障害学やソーシャルワーク等の共同研究が多く、抽象的な「地域」をよりイメージしやすい「場所」に限定し、GPSの利用、フォトボイス、街中を移動しながらのインタビューなど、言語のみに頼らず、「その場」で行う方法を使うことで、知的障害者が参加しやすいという特徴がある。

場所に注目した研究からは、知的障害者が身近な生活圏内で、包摂と排除の両方を経験していることが分かる。まず「近所」におけるインクルージョンの要素には、①近所の魅力、②近隣住民との関わり、③周辺エリアでできる活動、④近所での役割やちょっとした仕事、⑤自律、⑥顔なじみがある(Overmars-Marx, Thomése and Meininger 2018)。日常的な場所で包摂と排除の空間は複雑に入り組み、排除の文脈における当事者のよりどころとして包摂的な空間が機能し、なかでも重要な当事者同士の支え合いは、障害者を対象とした閉鎖的空間ではなく、誰もが使う場であるパブなどで行われている(Power and Barlett 2018)。公的サービスを利用しない知的障害者が感じる地域生活の障壁には、不親切な住民や自由に使える金銭の不足以上に、地域での差別やいじめに抗するという現実的課題があり(例：地元でできること、初めての参加に必要な手助けを得ること、移動の安全性)、必要な支援は必ずしもサービスに関係せず(例：情報、アドボカシー、新しいことを始める機会)、地域には様々な改善点がある(例：「異なる人」の存在の理解、安全な場所に添付するステッカー、夜間の安全性の確保)(Mooney, Rafique and Tilly 2019)。人間関係を取り結ぶのが難しい都市部では、買い物や消費の場がインクルージョンの機会となりえる。知的障害者にとっては、買い物、特に飲食に関する消費が日課の重要な活動であり、買い物を通して①自律と責任、②社交性、③存在、参加、帰属といった様々な経験をしている(Wilton, Schormans and Marquis 2018)。これらの研究は、サービス受給資格の厳格化と、そこから必要に迫られるセルフアドボカシー活動を背景としていることもあり、知的障害者を対象とするサービスから離れた場で調査をすることにより、本人たちから見た地域とのつながりを明らかにすることに成功している。

もう一つは、インクルージョンの主観的側面に着目する belong に関する研究である。

Mahar, Cobigo and Stuart(2012) は、障害者によるサービス評価、とりわけインクルージョンの指標の一つとして belong に注目し、「共通の経験、信念、または個人的特質を基盤として築かれた、他者との相互関係から派生する価値と尊敬の主観的感情」と定義づける。belong の主題としてポジショナリティ、アイデンティティ、関係性、場所との関係、社会への貢献が、そして強みとして望ましいと考えられる解決策を外から押し付けるのではなく、個別性や本人の主観に焦点を当てることがあり、知的障害というレッテルを超えてその人が誰なのか、その人の歴史、重要なもの、場所、そしてその人の歴史を知ろうとすることがある (Strnadová, Johnson and Walmsley 2018)。belong の日本語訳としては「帰属感」「居場所」「つながり」に近いものの、インクルージョンの本来多面的な意味が、経済的な参加に矮小化されたことへの抵抗として着目されたという経緯からは、普遍的な共通理解を目指すより、当事者一人ひとりが自分の経験と照らし合わせて語ることが重要である (森口 2020)。

知的障害者とともに belong を明らかにしようとする調査も数多くある。Milner and Kelly(2009) は、belong を感じる場所の特徴として、①自分で選んだ活動があること、②自分を知る人の存在、③相互依存性と価値ある貢献、④参加への期待、⑤心理的な安全があるとした。belong のこうした特徴は以下の調査でも概ね共通し、加えて Strnadová, Johnson and Walmsley(2018) は、セルフアドボカシー活動への参加を偏見といじめという belong の障壁への対抗戦略としていること、Renwick et al.(2019) は社会規範と他者からの期待に影響を受ける belong に折り合いをつけるための交渉の必要性と、社会的に望ましいとされる活動への参加をインクルージョンとする西洋的な考えからの決別として belong を経験していること、Kaley et al.(2021) は 予算削減と受給資格の厳格化の中、地域の情報や意味ある選択肢を得る機会として、セルフアドボカシーグループやボランティアの機会が重要であることを明らかにした。このように、インクルージョンの主観的側面に注目することで、つながりや居場所を感じる場の数や種類ではなく、当事者にとっての意味や障壁が明らかとなる。また、場所に注目した研究同様、アイデンティティを保ち、厳しい状況下を切り抜くため、セルフアドボカシー活動が当事者にとって大きな意味をもつことが分かる。

## 2 研究方法

### 2.1 フォトボイス

本研究では、フォトボイスによりデータを取集した。フォトボイスは、写真を使ってコミュニティの課題を明らかにし、現状を改善するための方法として考案された調査法であり、力を持つ多数派ではない当事者の観点から現状を理解する、最も脆弱な立場に置かれた人の参加を可能にする、研究者や支援者には接近が難しい情報を収集する、コミュニティの弱みだけでなく強みも明らかにするといった観点から、コミュニティにおけるニーズアセスメントに適している (Wang1997)。手続きとしては概ね事前説明、写真撮影、写真についての話し合い、データの活用という流れで進め、参加者が撮影した写真の中から数枚を選び、写真の意味を

説明したり、グループで話し合ったり、個人にインタビューしたりする。ソーシャルワークの領域でも届けられにくい声や観点を可視化し、問題提起につなげるために使われ、日本での先行研究は少ないものの、外国にルーツをもつ子どものエンパワメント(武田 2013)、多文化保育のコンピテンシー育成(市川 2020)、東日本大震災で被災した女性の経験(Yoshihama and Yunomae 2018)などで使われている。システマティックレビューによると、知的障害の領域では31本の論文が査読付き論文として採用されている(Chinn and Balota 2023)。本研究では、知的障害者にもイメージしやすいよう、「くらしをパチリ調査」と呼ぶことにした。

## 2.2 参加者

本研究は、東京都内2つの区で実施し、10名の知的障害者が参加した。A区では、知的障害者の本人活動グループメンバー3名が参加した。筆者は足かけ10年この活動グループに関わっている。B区では、相談支援事業所を併設する障害者福祉センター、就労支援センター、余暇活動グループの協力を得て案内チラシを配布し、センター職員から関心がありそうな人に声をかけてもらった。参加条件はB区在住の知的障害者で、自分で参加したいと希望する人であり、手帳の有無や障害支援区分などは問わなかった。その結果、余暇活動グループを通じた協力依頼には5名、相談支援事業所を通じた協力依頼には4名の希望があった。体調不良による欠席および説明会参加後の辞退がそれぞれ1名あり、最終的にB区では7名が参加した。参加者の10名の概要として、年齢は20代と30代が各3名、40代が4名、仕事は一般就労と福祉的就労が各5名、移動時の支援は不要が5名、初めての場所など時々必要が2名、常時必要が2名であり、全員が家族と同居している(表1)。

表1 くらしをパチリ調査参加者

参加者名	年齢	仕事	移動時支援	グループ(グルーピング)
キヨシ	40代	一般就労	不要	A(本人活動グループ)
ユキコ	40代	福祉的就労	時々必要	A(本人活動グループ)
アズサ	30代	福祉的就労	ほぼ常時必要	A(本人活動グループ)
シゲル	40代	一般就労	不要	B①(余暇活動グループ)
コウイチ	40代	一般就労	不要	B①(余暇活動グループ)
タカノリ	30代	一般就労	不要	B①(余暇活動グループ)
サエ	30代	福祉的就労	常時必要	B①(余暇活動グループ)
ミノル	20代	一般就労	不要	B②(障害者福祉センター)
ヒロト	20代	福祉的就労	不要	B②(障害者福祉センター)
マキ	20代	福祉的就労	時々必要	B②(障害者福祉センター)

注：名前はすべて仮名である

## 2.3 データ収集と分析の方法

データ収集と分析のため、各グループ月1回のワークショップを3か月連続で行った。参加者は募集の経緯ごとにグルーピングし(表1)、グループB②は初対面の参加者を含んだ。ワークショップの実施時期は2021年12月～2022年6月で、実施場所は、グループAはレンタルスペース、グループB①とB②は障害者福祉センターの会議室であった。進行は筆者が担当し、グループAはグループの支援者、グループB①とB②は障害者福祉センターの職員2名および記録担当者が同席し情報支援を行った。話し合いは録画のうえ逐語録を作成し、筆者によるフィールドメモ、終了後に筆者と支援者で行ったふりかえりの記録、参加者が撮影した写真とあわせて、データとした。

第1回のワークショップは調査の説明を目的とし、各自の自己紹介に続き、調査目的、写真の撮り方、倫理的配慮、今後のスケジュールなど、資料を使って説明した。写真は、次回までの1か月の間に、「A(B)区で好きなおとこ」「普段よく行くところ」「よく会う人」の写真を撮り、5枚を選んで事前に提出するよう依頼した。また、必要に応じて撮影時に使えるよう、調査主旨を説明した「お願いカード」を配布した。写真撮影用にデジタルカメラ、使い捨てカメラを準備したところ、Aグループは全員がデジタルカメラ、B①およびB②グループは全員が自分のスマートフォンを選択し、デジタルカメラは次回持参、スマホで撮影した写真はQRコードを使い筆者にメールで送付することとした。説明を聞き辞退した1名を除く10名から同意書を回収した。

第2回は、撮影した写真の発表と話し合いを行った。フォトボイスでは写真の表面的な理解を超えた参加者同士の対話を重視するため、参加者同士が質問しあい、似たような写真や共通する課題について話し合うことで共通点や相違点の発見につなげる。そのことが、排除・孤立されがちな参加者が自分だけの経験や問題でないことに気づき、グループ内での学習、サポート、エンパワメントにつながるからである(Breny and McMorro 2021: 51)。話し合いは主に筆者が進行し、スクリーンに投影した写真をもとに、各参加者には「これは何の写真ですか」「この写真をとった理由を教えてください」、他の参加者には「同じような経験はありますか」「〇〇さんの場合はどうですか」といった質問により、共通点や異なる点を引き出すことを意図した。また、場所や人とのつながりの量ではなく、その人にとってのつながりの意味と、きっかけや継続性、影響する要因を理解するよう心掛けた。話し合いが進むにつれ、参加者も自由に意見を言い、質問しあった。写真は全員が5枚以上撮影し全ての写真を使ったが、人の写真は少なかった。そのため、撮影できなかった写真についても質問した(Akkerman 2014)。フォトボイスによるグループディスカッションの分析で重要なのは、話し合いを活性化させた写真を念頭に置くことである(Breny and McMorro 2021)。そのため終了時には話し合いの主題と大事な点をまとめ、全員で確認した。グループB②では写真が少ない「仕事がない日に行く場所や会う人」「近所」について知りたいという意見があったため、追加で写真を撮ることとした。撮影した写真の枚数は参加者によって異なったが(表2)、写真が少ない

から人や場所とのつながりが少ないという訳ではなく、写真を撮ることへの関心と慣れが影響していた。

第3回は、追加した写真についての話し合いと分析案の検討および、「ドット投票」を行った。ドット投票は、障害福祉計画策定に先立ち行うアンケート調査項目および選択肢の抜粋をポスター形式にしたものを元に参加者で話し合い、最終的にあてはまる選択肢にシールを貼るというものであり、今回は分析対象外とする。フォトボイスの分析案は上述したデータを用いて第3回までに筆者が作成した。本研究では「撮影しなかったこと」についても話し合ったため、①写真を二次的なものとし、逐語録や記録類を先にコーディングする、②それぞれの写真に合う説明をつけることを目的に逐語録を分析する、③写真とそれに合うストーリーの適合性を参加者が確認する機会をもつという Breny and McMorrow(2021)の方法を参考にした。分析案はパワーポイントでまとめて筆者が説明し、参加者による確認、検討後、修正した。

## 2.4 倫理的配慮

本調査は、上智大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を受けている(承認番号 2020 - 61)。

表2 「くらしをパチリ調査」撮影写真一覧

参加者名	撮影した場所	撮影した人
キヨシ	公園(2か所)、卒業した高校、歯科医院、職場	職場の友人、職場の支援者
ユキコ	ガイドヘルパー講座の会場、飲食店(6カ所)、商店(1か所)、神社(2か所…初詣)、公園、ビルのモニュメント、公民館	なし
アズサ	美容院、飲食店(3か所)、カラオケ、書店、通所先、寺(墓参り)	母の友人、特別支援学校時代からの友人、美容師(行きつけの担当)
シゲル	公園(2か所)、区役所、最寄り駅、バス停、職場、スカイツリー	なし
コウイチ	公園、区役所、大型商業施設、商店(2か所)、職場	スポーツサークルの友人
タカノリ	マッサージ店、飲食店、職場	マッサージ店店員
サエ	障害福祉センター、大型商業施設、販売店、飲食店、歯科医院、カラオケ、通所先	なし
ミノル	町内(2か所)、教会(思い出の場所)	町内会会員
ヒロト	飲食店(7か所)、駅、バス停、他区出張所、障害福祉センター	なし
マキ	神社仏閣(2か所)、公園、町内(キッチンカーが止まっている場所、通勤路)、最寄り駅、バス停、飲食店(4カ所)、商店(2か所)、コンビニ、図書館、通所先	通所先の支援者

### 3 結果

知的障害のある人が参加したフォトボイス調査により、以下のことが明らかになった。まず参加者のよく行く場所は、使いやすい公共交通機関や通勤、通所のため使用する路線で規定され、余暇時の外出では商業施設での消費行動が目立つものの、郵便局や銀行、日用品を買う商店といった日々の暮らしに関係のある店などに行く機会は少なかった。よく行く場所とのつながりには、地域への愛着や誇り、自分の好みの反映、落ち着きや心の支え、存在と貢献といった意味があった。よく会う人とのつながりについては、知的障害のある友人との存在が日々の安定した暮らしにつながり、職場の人との関係は差別やいじめはないものの肯定的ともいえず、近隣とのつながりは少なく、街中では職務として関わる人との出会いがあった。場所や人とのつながりには、情報と情報を得るためのサポート、安全な移動手段、自分を知っている人や困ったときに頼れる人の存在、出会いの機会と条件が影響していた。以下、「 」はインタビューでの発言を表す。

#### 3.1 場所とのつながりと意味

参加者がよく行きつながりを感じる場所には、様々な意味があった。第1は、地域への愛着や誇りである。参加者10名のうち8名は、幼少期から最長で50年近く同一区内に住んでいた。住民として慣れ親しんだ場として、小さい頃に遊んだ公園や家族と初詣に行く神社(ユキコ)、小さい頃から家族と散歩ででかける公園(シゲル)、町内の人とお祭りやお参りに行く神社(タカノリ)などがあった。また、住民ならではのおすすめや誇れる場として、近所に新しくできたパン屋(マキ)、富士山が見える場所(図1 キヨシ)、多くの観光客が訪れる区民として自慢の公園や観光スポット(コウイチ)等があり、ミノルは時々買い物をする商店について、「どうせならチェーン店ではなく、老舗の店で買い物をしたい。買い物をするのは家族にご褒美を上げたい時など」とコメントした。よく知っている場所だけでなく、新たに発見した場所の写真もあり、参加者は地元の良いと思う場所について、自信をもって他の参加者に紹介していた。



図1 富士山が見えるお気に入りの場所

「元旦に〇〇(駅名)前の歩道橋でとった富士山の写真。お気に入りの場所で、友だちに教えてもらった。

××(隣駅)からも良く見える」(キヨシ)

第2は、自分の好みや選択により、好きなことをする場所である。余暇時間の過ごし方と外出先は一人ひとり異なり、公園、神社仏閣など、費用をかけずに楽しむ場もあったが（「歴史が好きなんです」（マキ）、「好きな犬の種類があり、スマホでペットショップを調べて見に行く」（シゲル））、ファーストフードの飲食店や喫茶店、マッサージ店、カラオケ店、書店、大型商業施設といった場での消費や、そこに至るまでのプロセスを通じて、他者にあわせたり、決められたりすることなく、自分の好きなことを楽しんでいた（「友だちに教えてもらって一緒に行く店と、一人で行く店がある」（ユキコ）、「チラシで見つけた店と、看板で見つけた店」（タカノリ）、図2 アズサ）。給料を自分と両親の生活費に充てている参加者には、自分の楽しみのための写真が一枚もなく、本人の選択やコントロールが比較的及びやすい余暇や外出についても、家族の存在や自由に使える金銭の影響がうかがえた。



図2 この雑誌はありますか？

「家にある本の写真を撮って、そこにはない本を買ってもらった。図書館で〇〇（雑誌名）を見て、同じのを買いにいった。お店の人に〇〇はありますか？と聞いたら、『今あるのはこの本です』と同じ本を3冊出してくれた。図書館にあるのは古いので、本屋には新しいのしかなかった」（アズサ）

第3は、落ち着きや心の支えが得られる場であり、場所そのものが意味を持つ場合と、そこで出会う人が意味をもつ場合があった。一般就労の参加者は通勤時間の長さ、職場の人間関係、雇用の継続可否などからストレスを感じ、解消の場として公園や（「花が好きで時々見に行く、一人で行くことが多い」（キヨシ）、「桜は見ていると気持ちが和らぐ。いやなことを忘れられる」（コウイチ））、電車が見えるスポット（「ずっと電車みってます」（シゲル））、気分転換のためのレジャーの場（「出かける場所の意味は気分転換。コロナ前に良く行っていた場所はゲームセンター、カラオケ、ボーリングなど」（キヨシ））があった。また、3.2でも述べるように、知的障害のある仲間との活動の場に参加することが、1週間や1か月の楽しみや励みとなっていた。コウイチは、知的障害のある仲間が集うダンスサークルについて、次のように話した。

「ダンスを踊っていると、晴れた自分になってるってことを感じました。例えば、嫌なことがあって、落ち込んだ日って気持ち暗いと思うんですけど、気持ちがプラス、明るくなる。

ダンスもそうだし、みなさんの顔をみれる。また会えたねとかその声掛けが、私の生きがいというか、パワーになってる、すごく大事なもの。」

知的障害者の活動の場は、コロナ禍において大幅に制限された。Aグループのワークショップをレンタルスペースで行ったのも活動拠点が使えなくなったからであり、その時点で活動停止となっていた「安心する場所」として、社会教育施設で行われていた青年教室や、一般就労している知的障害者を対象とするサークルがあった。図7の居酒屋の写真について「全国の知的障害者さんに、出張ケータリングサービスとかを年に1度はお疲れさまのご褒美でやってほしい」というミノルの発言の背景には、例年楽しみにしているサークルの食事会への参加を、新型コロナウイルス感染を心配した母に止められた経験があった。

第4は、自分の存在や努力、貢献が認められるような場所である。自分たちの活動や存在を様々な人に知ってもらいたいという思いから、コウイチは、大会で好成績を残した競技チームの写真について「スペシャルオリンピックスを知らない人って大勢いるので、こういう楽しいことがあるんだよってことを伝えたい」と話した。仲間のために自分なりに考えて工夫している場、誰に評価されるわけでもなくとも毎日仕事を頑張っている場として職場があり(キヨシ、シゲル、タカノリ、図3マキ)、自分の経験を認められてゲストスピーカーを依頼された場として、在校生に向けて仕事の話をした出身高校(キヨシ)、利用する立場として自分の体験を発表したガイドヘルパー講座(ユキコ)があった。



図3 私の職場

「自分が普段している仕事の写真を撮れて本当によかった。(職場の)中、(仕事を)しているところが撮れた。」(マキ)

### 3.2 人とのつながり

参加者と人とのつながりとして第1に、知的障害のある友人との関係が日々の安定した暮らしにつながっていた。ほとんどの参加者が挙げたのが、区や障害者団体が主催する知的障害者を対象としたグループ活動の機会であり(例:青年教室、スポーツチーム、一般就労者向けの食事・交流会、余暇活動グループ)、参加理由として活動内容の楽しさ、同じ障害のある仲間との集まりで気が楽であることを挙げた(「同じレベルのハンディを持った仲間が、

話してるとすごく楽で、お互いの気持ちとか理解してくれるので、助かります」(コウイチ))。以前は家族と地域の活動によく参加していたが、「新天地、活躍の場を目指して」青年教室に行くようになったというミノルの意見からは、逆をいえば地域の活動では自分の居場所を見つけにくい、活躍しづらいといったことが考えられる。特別支援学校時代の友人とは、週末の外出などにより自分でつながりを継続する場合、親同士が会う機会を設けている場合もあるが、区外への通学だったことや転居により関係が途切れる場合もあり、上記のサークル等を通して新たに出会った友人との関係が中心だった。

第2に、職場の人からはあからさまな差別やいじめはないものの、肯定的に受け止めている訳でもなかった。支援者の存在もあり、一般就労している参加者の職場の人間関係は概ね良好だが、障害のない同僚に対しては遠慮があった。ミノルは、居酒屋の写真(図7)を撮影した理由として、歓迎会や忘年会などの飲み会は、自由参加だと参加していいかどうか判断に迷うため、全員参加にしてほしく、一緒に飲み会に行ってみたいが皆さん忙しく機会がないと話した。一方キヨシは、障害者雇用で採用された同僚を友人ととらえているが、「今の職場の人は友だちになれるか分からない。年齢が違う、住んでいるところが違うこともあって、あまり踏み込まないが、会話ができるだけでもよい」という認識であり、一般就労のコウイチ、シゲルも同様の見解であった。

第3に、近隣とのつながりは全体的に薄く、参加者全員が家族と同居ということもあり、何らかの形で家族の存在がうかがえた。例えば、父親を通した町内会活動への参加のように、親が近所付き合いの機会を作ろうとする場合と、親がいても関係が薄い場合があった(「呼び鈴を鳴らしても勧誘だと困るから)お父さんとお母さんしか出ないから、私なんかめったに出ない」(キヨシ)、「親は仲良くしている。だって話してるもん。わたしはあまりないけど」(ユキコ)、「親がいなくなったら何かあったとき誰に頼めばいいか心配」(コウイチ))。近所づきあいには居住地域の特徴も影響し、つきあいの少ない地区に住んでいる参加者は、「近所づきあい」が何かをイメージできなかった。一方、地区で盛んな「盆踊り」の写真をきっかけに、地域の活動を通した人とのつながりについて話が広がる場面があった(図4)。地域の行事が趣味となり、趣味を通して自分らしく生活することが、そのまま人とのつながりに発展する人がいる一方、地域の情報が得られないため、つながりの機会に至れない人もいた。



ヒト:盆踊りでよく会う人がいて、一度踊りだすと3~4時間。その方のブログを見ると「ボンオドラーになりませんか」と書いてあって、つながった。町会で、お祭りになると準備から片付けまで。

ミノル:自分も、町会の盆踊りを手伝った。準備、名簿づくり、会計、お祭りの片付けなどをした。

マキ:自分も盆踊りを踊ってみようかな。盆踊りは踊ってなくて難しいのか簡単なかわからない。どうしたらいいのか、どこでできるかわからない。

ヒト:地域で定期的に講習会をやっている。〇〇出張所で何時からとか、SNSをチェックするとわかる。

図4 盆踊りを通じた地域とのつながり

第4に、職員、店員や駅員など、職務として関わる人の存在があった。例えば相談に行った後と一緒に茶を飲みに行く就労支援センターの職員(タカノリ)、かかりつけ医や薬局など定期的に通う場所の職員(キヨシ、サエ、ミノル)、大型靴販売店の親切な店員(ユキコ)、「お願いカード」を見せたら写真を撮らせてくれたマッサージ店店員(タカノリ)などである。家族、友人、職場以外の人とのつながりについて「顔なじみで声をかけてくれる人」を尋ねると、駅員や警備員を挙げる人もいた(「仲良いわけじゃないんですけど、昔から色々駅員さんに、いってらっしゃいとか、元気?とか声をかけてくれる人もいる」(コウイチ)、「最近、お巡りさんに会いました。帰りにバスで、一緒にすれ違う感じで、声をかけてみた。警備員さんです。」(シゲル))。普段つながりのある場や人について話し合ったこともあり、嫌な思いをしたという話はあまり聞かれなかった。消費者として対応される限り嫌な思いをすることもないが、金銭を媒介せず関係を築く機会がないともいえる。

### 3.3 場所や人とのつながりに影響すること

参加者と場所、人とのつながりに影響することとして、第1に情報と連絡手段があり、居住地区や地域の活動、必要な支援についての情報を得る機会はほとんどなかった。通所先の事業所や相談支援事業所では福祉サービスについての情報は得られる。しかし、事業所は利用者の居住地域の生活情報まで把握しているわけではなく、自治体からの情報も十分に届かないためである(「情報、これしかない!」(ヒト))。広報紙面は読みにくく内容も理解しづらく、情報収集の手段として区のLINEに登録して情報を得ているのは1人のみであった。図5は、近所での「ラジオ体操」をきっかけに話が展開した場面であり、情報や情報を得る機会が活動への参加やつながりに影響していることがわかる。この場面では、区の出張所に

ついて、ヒロトから「出張所で情報が得られるのに知られていない。出張所でしていることについて、わかりやすいお知らせのようなものがあるとよい。スタッフはお年寄りが多く、対応が事務的」という意見があった。

身近な場で住民サービスを受けられる自治体の出張所は、福祉サービス利用者としてではなく、住民として様々な情報を得ることができる場である。馴染みのある人からすれば身近で便利なのでもっと知ってもらいたいが(ヒロト)、知らない人にとっては、「どこにあるかはなんとなく知っているが良くわからない」(マキ)、「家族と行くがどんなところかはよくわからない」(ミノル)場所であった。参加者は、街中の看板やアイコン、テレビから日常的な情報を収集し、スマホを持っている人は、通話、メッセージ、検索とそれぞれの使い方をしていた。コロナ禍において一気に広まったビデオ通話は、自分で、あるいは家族やグループ活動の場で支援を受け利用できる人がいる一方、自宅にインターネット環境がない、費用捻出の困難さやトラブルに巻き込まれることの心配からスマホをもたず、連絡手段が公衆電話のみの人もいた。



ミノル:私はラジオ体操に2つ参加していて、最終日には  
サンドイッチとか寄付してくれるんです。

一同: えー!!いいな~!!

ヒロト:各地域によっておみやげが違います。ラジオ体操連盟  
の講習を受講するとウェアをもらったり、公共の場で講師ができ  
たりする。みんな受けないから地域のリタイアした人が受けて、  
特権として前で指導したりする。

マキ:広報があるのは知ってるけど、内容はあまり見たことがない。(障害福祉センター名)のところしかない。出張  
所はピンとこない。町内会は場所がどこか分からない。ラジオ体操はどこでやっているか知らない。

図5 ラジオ体操を通じた地域とのつながり

第2に、安全でわかりやすい移動手段の有無が、行動範囲や活動内容を決定していることがあった。参加者の多くは単独で外出でき、それを可能にするの一つに、切符を買わないですむチャージ式カードがあった。しかし、困りごととして「チャージが足りなくて困ることがある」(コウイチ)、「定期券をなくして、どうしたらいいか分からず歩いて帰ったことがある」(シゲル)、「電車は降りて(改札から)出るまでの間、どこにいるか分からなくなってしまう」(ユキコ)といったことがあり、駅員が見つからない駅では、助けを求めようにも求められなかった。一方、路線の複雑さに加え、徒歩や自転車で「わかる範囲」がいいことと、費用がかかることから、移動手段は徒歩や自転車が中心の人や(「都営バスの無料パスは使うけど、電車はあまり使わない」(キヨシ))、近所でのイベントは歩いて行けるところ、一人で

行ける場所であるとよいという意見もあった(ヒロト、ミノル、マキ)。ガイドヘルパーの利用により行動範囲や活動が広がる一方(「わからないからヘルパーさんと一緒に行く」(ユキコ)、「新しい場所に行く場合はヘルパーがいると安心できる」(ヒロト)、「行ったことがないところ」(アズサ))、ヘルパーの事務的、形式的な関わりへの批判もあった(「ただいて、ただやってくれるだけ。形だけいるけど、上から目線、マニュアル通りの対応の人もある」(ヒロト))。

第3に、困った時に頼れる人や場、自分を知っている人を行動範囲に確保していることがあった。良く行くのは、なじみがある、知っている、行きやすい場所であり、知らないところではパニックになってしまうこともあるからだ(ユキコ)。何かあった時に立ち寄れる場所として、顔なじみの職員がいる福祉関連機関があり(社会教育施設(キヨシ、ユキコ、アズサ)、障害者福祉センター(ミノル、サエ)、就労支援センター(キヨシ))、駅員、警備員、警察官など自分の行動範囲内に声をかけられる人を確保している場合もあった(コウイチ、シゲル)。グループAのメンバーにとって社会教育施設は、普段から活動で利用し、特に用事がない時でも気軽に立ち寄れる場である(図6)。一方、B区に転入してきたマキは、自宅から最寄り駅までの経路で工事中の場所や夜通ると暗い場所、使いづらい和式トイレ等の写真について、「慣れている道を通るので、困ることや怖いと思うことはない」、「きれいで明るいところは安心して使える」「犬を連れてくる人がいるので、ドッグランをつくってほしい」と話した。場所、人とのつながりが少ないこともあってか、自分なりに安心できる場所を確保したうえで行動していた。



キヨシ:ここだけの話だけど、トイレに行きたくなったらここで借りる

アズサ:(職員の)〇〇さんに、(用はないけど)会う。

ユキコ:楽しいところ。いろんな人に会える。小さいころ、ここでバレエをやったことがあるんです。

図6 社会教育館ってどんなところ？

そして第4に、様々な人と出会い、自分について語り、お互いを知り合うための機会と条件が不足していた。分かりやすい情報や移動手段が担保されたとしても、知的障害者が自ら人と出会う機会を作るのは簡単なことではない。知的障害者を対象とする活動でも、居住地、就労形態、費用といった条件により参加できないことがあり、自分で情報収集できる場合でも、

問い合わせて初めて分かることもあった。比較的若い参加者のグループB②でミノルは、他区の出張所の写真を撮影した理由について、「全国のパチリ調査委員会を作って、全国の障害福祉計画や写真展を盛況になりますと幸いです」、青年教室のメンバーとも「一緒にくらし調査をしたいんですが。ぜひ地域のつながりが上手くできれば」と話し、ヒロトもそれに賛成した。図7は、ミノルが撮った居酒屋の写真から話が展開した場面であり、機会があっても他者、とりわけ健常者への遠慮(ミノル)、求められる条件にあわないこと(マキ)、他者により規定されるのではない関係性への希求(ヒロト)から、それぞれ新たな出会いの機会を求めている。図7のヒロトの発言は、第3回のワークショップの際伝えたいこととして、紙に書いて準備してきたことの一部であり、自分の意見や、支援によって実現されないズレを伝えるため、話し合いの場を利用しようとしたことがわかる。



ミノル:ノンアルコールはこちらで飲みなさいと。行くのは仕事の打ち上げをするとき。本当は行ってないけど、打ち上げをするのはこんなところなのか。一緒に行く機会がないのは、皆さんいろいろあって忙しいから。

マキ:お酒が飲めなくてもいいなら行ってみたい。友だちと出会う機会はあまりない。出かける機会もあまりない。お金がかかっちゃうから。交流っていうのがすごくいい!なんか、他の団体とやるのが楽しい。

ヒロト:友だちがほしい。27歳になり、出かける楽しみを味わいたんだけど、友だちと出かけたりできない。○○、\*\*\*(知的障害者向けのサークル名)は違う。僕がやりたいことは、友だちとご飯食べたり、日帰りで温泉に行ったりしたい。△△や□□は少し近かったんだけど、今は就労していないから使えなくなってしまった。相談できる所、アドバイス、一緒に行ってくれるようなボランティアさんがほしい。◎◎(市民向けの会)は一人で参加しているけど、友だちと一緒にならもっと楽しい。

図7 打ち上げをするのはこんなところなのか

#### 4 考察

本研究では、当事者の観点から現状を理解するのに適したフォトボイスを用いることで、「知的障害者の地域生活」とひとくくりにできない暮らしの多様性と、本人から見た地域とのつながりを明らかにした。まず、つながりのある場は本人たちにとって、地域への愛着や誇り、自分の好みの反映、落ち着きや心の支え、存在と貢献といった意味があり、Overmars-Marx, Thomése and Meininger(2018)、Wilton,Schormans and Marquis(2018)、Milner and Kelly(2009)といった、インクルージョンの場や主観的側面である belong に関する先行研究と共通点があった。また、人とのつながりには、知的障害のある友人の存在と暮らしの安定、あからさまな

差別はないものの積極的でもない職場の人間関係、近隣とのつながりの薄さ、サービスとして関わる人の存在があり、自ら持つつながりに焦点をあてたこともあって、先行研究と違って差別や排除に関する言及はなかった。そして、つながりに影響することの分析からは、情報理解、コミュニケーション、移動の困難といった、一見すると知的障害というインバメントから生じる「特性」として理解されることがあった。しかし、誰もが利用するサービスの利用者として積極的に位置づけられず、困った時に誰かに頼れるような雰囲気もなく、自力での対処が求められる社会の構図も透けて見え、Mooney,Rafique and Tilly(2019)による、必要な支援はサービスに限らず、地域の様々な課題に対し自分たちなりの戦略をもつという結果と共通点が見られた。以下では当事者とともインクルーシブ社会の実現を目指すため、「地域に根差して暮らす人という理解」「当事者の観点からの課題の相対化」「多様な人との出会いを通して関係をつくる機会」という3点から考察する。

第1は、知的障害者を「地域に根差して暮らす人」として理解することである。社会福祉の「支援」の場では知的障害を治療や訓練、保護の対象としてとらえてきたこともあり、本人中心の視点を取り入れながらも、アセスメントは社会への適応課題、そこから生じるサービスニーズに焦点化しやすく(笠原2020)、今日の正しい障害理解に向けた「知的障害」の描かれ方も、固定化した理解につながりやすい。地域で暮らす上で巻き込まれやすい「トラブル」の防止や対処、権利擁護は当然必要であるが、地域に愛着を持ち、地域の活動に参加し自分らしく生きたいと願う生活者の側面が過小評価されていると考える。知的障害者は進学や就職による転居が少なく、同居する家族の都合や施設への入所がなければ、同じ地域で暮らし続けることが多い。本人たちから見た「この町の親切な店」「この街のいいところ」といったマップの作成や、ワークショップの企画を通して、これまで異なる文脈で論じられてきた福祉当事者と住民の参加の連結(加山2017)にも寄与するのではないか。

一方、地域の活動に参加するための情報や安全の不十分さという、地域社会や制度の排除的側面も明らかになった。役所の出張所や社会教育機関等、身近な住民向けサービス提供機関への期待は、障害者権利条約第19条(c)一般住民向けのサービスや設備が利用でき、障害者のニーズに対応していることにも該当し、徒歩圏内に安心して立ち寄れる場があることで、情報を得るだけでなく、地域の人と知り合い、自分たちを知ってもらえる場としても機能する。地域情報や意味ある選択肢を得る機会としてのセルフアドボカシーやボランティアの重要性というKaley et al.(2021)の指摘は、サービス受給資格の厳格化という文脈におけるものであるが、人手不足や効率化から様々なサービスのIT化、無人化が進み、権利保障としての条件整備に時間がかかる日本の状況においても参考になる。

第2は、当事者の観点からの課題の相対化であり、支援者による判断を前提とするのではなく、当事者にとっての意味を理解しようとすることである。belongに関する先行研究と同様、本研究に参加した知的障害者は、一律に健常者とのつながりを求めている訳ではなく、当事者とのつながりを重視していた。その背景には、今回の調査では十分に語られなかった

差別や排除の経験があり、お互いに分かり合え、必要な情報や経験を共有できる当事者とのつながりが、支援者が考える以上に重要な意味をもつためと考えられる。また、移動支援の利用による外出の機会拡大への評価とあわせ、ガイドヘルパーの形式的関与への言及もあった。参加者は明言しなかったものの、これらは本人たちの経験を不問にし、健常者と交流できればいい、ガイドヘルパーと外出できればいいとする暗黙の想定に対する、声や形にならない不満、違和感であり、室田(2020)が指摘する、一般的な望ましさや価値判断に基づき何を、どこまで、どのような状態にするかではなく、どうやって実現するかに力点を置くという課題の相対化を、当事者が行ったものといえるのではないか。歴史遺産の価値を知的障害者が享受することを目的に行ったインクルーシブリサーチの結果で、本人たちが強調したのは、合理的配慮として紹介されるような情報提供の工夫以上に、自分たちが迎え入れられるような雰囲気やスタッフの態度であった(Rix and Lowe 2010)。真に本人たちの声に耳を傾けることは、現状を変える手がかりとなりうる。

当事者から見たつながりの意味は、支援を見直す上で参考になる。例えば、外出の際に利用できる移動支援は、ガイドライン等に基づいて対象となる(ならない)外出内容や外出先が説明されることが多い(例：日常生活上必要な外出-買い物をするための移動-商店、デパート)。意思決定支援の議論を参考にすれば、余暇について本人の選好が分かりづらい場合、いろいろな場所への外出を試し、本人の反応から好みを理解するという方法が考えられるが、この時行先だけではなく「地域への愛着や誇り」「自分の好みの反映」「落ち着きや心の支え」「存在と貢献」のように、本人たちにとっての場所の意味から考えることができる。空閑が提唱するソーシャルワークの「生活場モデル」の背景には、「個」ではなく「場」が日本人の基底となるという考えがあり、人が自らの生活の主体であるためには、自らが所属する、あるいは関係する「場」を重要視するという(空閑 2014: 133)。本来はつながりをつくるための手段である「居場所づくり」も、場の創出が目的化すると、設置数や利用人数といった量的指標で評価されがちであるため、当事者にとっての意味から評価があるとよいのではないか。

第3に、多様な人との出会いを通して、関係をつくる機会である。今回の参加者は、何らかの形で身近に支援者や理解者がいるものの、話し合いは障害福祉サービスや支援者に焦点化しなかった。そのためか、参加者の発言から推測されるのは、危機的状態あるいは特定のトピックで介入する「専門職によるケア」と異なり、いつもの暮らしの中でまだ明確ではないモヤモヤした段階から関わるような、また関係のありようからなされるような「ベースとなる支援」(三井 2018: 55-56)に近い関わりの必要性だった。三井は、家族や友人といったあたりまえのように「与えられる」インフォーマルな関係から多くの人がベースの支援を得る一方、排除の蓄積によりそうした機会が得られない人がいることを指摘する(三井 2018: 54)。筆者が知的障害のある人たちと行ったインクルーシブリサーチ「しょうらいのくらし調査」でも、最も大きな発見は、将来の暮らしについて選択肢がないこともさることながら、考える機会や一緒に考える人がいないということであり(笠原 2020)西村(2011)は、地域の中

で一市民として色々な人と関わりを持ちたいという願いからつくった「居場所」は、障害のない人との関わりを通して自己受容や人間関係の濃淡を学ぶ場であり、また本人に地域の情報を伝え、活動の理解や周知を図る情報発信基地であるべきと考察する。助言やサービス提供は支援の重要な機能であり、サービスの充実や、専門性の向上は必要であるが、前提としての共にあるという関わりも同様に重要であり、必ずしも専門職によるものとは限らない。

他者との出会いで併せて考えたいのは、仲間との話し合いを通して学び、権利の実現を目指すセルフアドボカシーの意義である。現在は一定の影響をもつようになったイギリスのセルフアドボカシーグループも、1980年代の当初はサービス提供の場における支援者の取組から始まり、その後「自分のために話す」スキル開発およびアイデンティティ形成の時期を経て、集团的利益を代表して変化を求める運動組織としての側面を持つようになった(Buchanan and Walmsley2008)。日本では知的障害者のセルフアドボカシー活動が低調であり、学びや決定の機会を極端に制限されてきた歴史的背景がある。他者の意向に影響を受けやすい知的障害者の場合「本人」を強調する重要性があるものの、自己の強調は自己責任を求める方向に容易に転嫁する。そのため、時に差別や理不尽な扱いを受ける本人にとって、まずは安心して自己を表現できる場、学びの場があることが必要であり、こうした機会の積み重ねが、総括所見で強調された当事者参画を進める前提ともなる。Buchanan and Walmsley(2008)はまた、セルフアドボカシーグループの運動体としての役割が高まり、地方の政策決定場面に参画を果たす一方、他者が設定する課題やその意図に取り込まれることや参画の形骸化に警鐘を鳴らした。それから15年以上経過するが、今後日本の現状にあったセルフアドボカシー活動の展開を考える上でも重要な指摘である。

本論は、障害福祉事業所の選択肢は多いものの、人とのつながりが希薄である都市部で、わずか10人の知的障害者が参加した調査の結果である。参加者募集の際には相談支援事業所の協力を得たが、知的障害者のうち障害福祉サービス利用者の割合は約5割であり(厚生労働省2018)、地域生活やインクルージョンという観点からは、サービスを使わない人の協力が必要である。また、フォトボイスにより参加しやすさを工夫したものの、話し合いが中心であり、発言の引用も一部の参加者に偏った。しかし、話し合いの場面では、発言が少ない人の意見を含め、参加者がお互いを理解しようとしていたことが印象的である。現状では協力者を募るルート、調査への参加希望者ともに限られている。調査を通じて本人たちが訴えたように、また上述したセルフアドボカシーの課題もふまえ、様々な人と出会い、話し合い、ともに考える機会を作る必要がある。

最後に、本研究で用いたフォトボイスは、調査結果を現状の変化に役立てることを調査の最終段階に位置付ける。2.3でふれた「ドット投票」の分析結果と合わせ、A区では区内の福祉関係者が集まる大会でのポスター発表を参加者が、区障害福祉計画担当者への報告を筆者が行った。B区では区障害福祉計画担当者、関係者への報告を参加者と筆者が行い、障害者週間にあわせた区役所での展示会でポスターを掲示した。その後、A区では障害福祉計画

策定に先立つ調査の一環として知的障害者へのドット投票を用いたグループインタビューの実施、B区では障害者団体からのヒアリングに先立つ区職員への研修会の実施につながった。詳細は別稿に譲りたい。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP20K02190 の助成を受けている。

#### (引用文献)

- Akkerman, Alma, Janssen, Cees G. C. and Kef, Sabina (2014) Perspectives of Employees with Intellectual Disabilities on Themes Relevant to Their Job Satisfaction. An Explorative Study Using Photovoice, Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities, 27(6), 542-554.
- 青木千帆子 (2013) 「『地域に出る』それは手段だったのか目的だったのか」『障害学研究』9, 68-92.
- Breny, Jean M. and McMorrow, Shannon L. (2021) Photovoice for Social Justice: Visual Representation in Action, SAGE.
- Buchanan, Ian and Walmsley, Jan (2006) Self-Advocacy in Historical Perspective, British Journal of Learning Disabilities, 34(3), 133-138.
- Chinn, Deborah and Balota, Bogdan (2023) A systematic review of photovoice research methods with people with intellectual disabilities, Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities, 36(4), 725-738.
- 福田真清 (2018) 「老障介護家庭における知的障害者の自立をめぐる経験—当事者視点で捉えた複線径路・等至性モデルによるプロセスの可視化を通して—」『社会福祉学』59(3), 30-43.
- Hall, E. (2010) Spaces of Social Inclusion and Belonging for People with Intellectual Disabilities, Journal of Intellectual Disability Research, 54, 48-57.
- 茨木尚子 (2020) 「支援過程における「組織の論理」と「専門職のミッション」の拮抗が生み出す課題：組織、専門職、当事者はいかに協働すべきか」『ソーシャルワーク実践研究：ソーシャルワークの実践と理論の総合誌：journal of social work practice and theory』(12), 3-14.
- 市川ヴィヴェカ (2020) 「『多文化と保育』の授業におけるフォトボイスの実施とその考察：“少数派が多数派になれる物語”を越えた先に ナラティブ・アプローチの観点から」『浦和論叢』63, 55-76.
- Kaley, Alexandra, Donnelly, John Paul, Donnelly, Lisa et al (2022) Researching belonging with people with learning disabilities: Self-building active community lives in the context of personalisation, British Journal of Learning Disabilities, 50(3), 307-320.

- 笠原千絵 (2020) 「「親なき後」の障害者の暮らしを支えるソーシャルワーク：本人主体の地域生活支援とアセスメント」『ソーシャルワーク実践研究：ソーシャルワークの実践と理論の総合誌』(12), 15-26.
- 加山弾 (2017) 「ソーシャルワーク実践における当事者・住民の参加をうながすことの基本的視点」『ソーシャルワーク研究』43,5-17.
- 厚生労働省 (2018) 「社会・援護局障害保健福祉部 企画課 平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査」
- Mahar, Alyson L., Cobigo, Virginie, Stuart, Heather(2013)Conceptualizing belonging,Disability and Rehabilitation,35(12), 1026-1032.
- Milner,Paul and Kelly,Berni(2009)Community participation and inclusion: people with disabilities defining their place, Disability & Society.24(1), 47.
- 三井さよ (2018) 『はじめてのケア論』有斐閣.
- Mooney,Fran, Rafique,Nazia, Tilly,Liz(2019)Getting Involved in the Community--What Stops Us? Findings from an Inclusive Research Project, British Journal of Learning Disabilities,47(4), 241-246.
- 森口弘美 (2020) 「ソーシャル・インクルージョンを実現する実践戦略としての belong の検討」『天理大学社会福祉学研究室紀要』22, 15-24.
- 武蔵博文・水内豊和 (2009) 「知的障害者の地域参加と余暇活用に関する調査研究」『富山大学人間発達科学部紀要』3 (2), 55-61.
- 西村愛 (2008) 「知的障害者が地域で生きるということ：インクルージョン実現に向けた『ちょこさぼ』実践をとおして」『保健福祉学研究』6, 99-111.
- 西村 愛 (2011) 「知的障害者の『居場所』づくりに関する一考察：インクルージョンの視点から」『人権問題研究』11, 45-57.
- 日本財団 (2023) 「知的障害者 40 人の「人生の岐路における選択」経験についての実態調査『自分で決める』を支える社会へ」2024 年 3 月 3 日検索 .  
<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2023/20231201-96636.html>
- 野波雄一・三木裕和 (2020) 「軽度知的障害者の卒業後の実態と求められる社会的支援：当事者へのインタビュー調査を通して」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』16(3), 19-41.
- Overmars - Marx,Tessa,Thomése,Fleur and Meininger, Herman(2018) Neighbourhood social inclusion from the perspective of people with intellectual disabilities: Relevant themes identified with the use of photovoice, Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities,32(1), 82-93.

- Power, Andrew and Bartlett, Ruth (2018) 'I shouldn't be living there because I am a sponger' : negotiating everyday geographies by people with learning disabilities, Disability & Society, 33(4), 562.
- Renwick, Rebecca, DuBois, Denise, Cowen, Jasmine et al. (2019) Voices of youths on engagement in community life: a theoretical framework of belonging, Disability & Society, 34(6), 945-971.
- Rix, Jonathan and Lowe, Ticky (2010). Including people with learning difficulties in cultural and heritage sites, International Journal of Heritage Studies, 16(3) pp. 207-224.
- 下尾直子 (2020) 「親元から一人暮らしを始めた知的障害のある娘と母の内的変容—ひとまずの「自立生活」から真の「自立」へ向けて」『社会福祉 = Social Welfare』 60, 69-81.
- Strnadová, Iva, Johnson, Kelley and Walmsley, Jan (2018) "... but if You're Afraid of Things, How Are You Meant to Belong?" What Belonging Means to People with Intellectual Disabilities?, Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities, 31(6), 1091-1102.
- 鈴木良 (2009) 「知的障害者による施設入所・地域移行の経験」『障害学研究』 (5), 137-163.
- 鈴木良 (2010) 『知的障害者の地域移行と地域生活：自己と相互作用秩序の障害学』 現代書館 .
- 鈴木良 (2013) 「知的障害者の脱施設化 / 地域移行政策の成果に関わる評価研究：海外と日本の論文を比較して」『社会福祉学』 53(4), 137-149.
- 武田丈・原弘輝 (2013) 「外国にルーツを持つ子どもたちに対する参加型調査の可能性：フォトボイスを活用した事例をもとに」『Human Welfare : HW』 5(1), 45-57.
- 高橋悦子 (2014) 「当事者からみた相談支援：知的障害当事者へのインタビューを通して」『ノーマライゼーション：障害者の福祉』 34(6), 33-35.
- 鳥海直美 (2017) 「中高生の知的障害児が取り組む自立生活プログラムの開発—障害児の地域生活支援におけるアクションリサーチを通して—」『四天王寺大学紀要』 (63), 37-54.
- Yoshihama, Mieko and Yunomae, Tomoko (2018) Participatory Investigation of the Great East Japan Disaster: PhotoVoice from Women Affected by the Calamity, Social Work, 63(3), 234-243.
- Wang, C. and Burris, M. A. (1997) Photovoice: concept, methodology, and use for participatory needs assessment, Health Education & Behavior, 24(3), 369-387.
- Wilton, Robert, Fudge Schormans, Ann and Marquis, Nick (2018) Shopping, social inclusion and the urban geographies of people with intellectual disability, Social & Cultural Geography, 19(2), 230-252.

## Community life from the perspective of people with intellectual disabilities: connections with people and places through the PhotoVoice" Snapshots your life study"

Chie Kasahara

**Abstract :** In this study, a photo voice was conducted with people with intellectual disabilities in order to examine the current situation of community life from the perspective of people with intellectual disabilities, who are service beneficiaries and citizens. The results showed that the places frequented by people with intellectual disabilities had various meanings, such as attachment to and pride in the community, doing what they like, gaining a sense of calm, and being recognized. Regarding connections with other people, connecting with friends with intellectual disabilities leads to a stable daily life, relationships with people at work are not positive although there is no discrimination or bullying, few connections with neighbors, and in town there are encounters with people who are involved in their duties. It was also found that place and connections with people were influenced by information and the means to obtain information, safe transportation, the presence of people who know them and whom they can turn to in times of need, and the opportunities and conditions for meeting others.

**Keywords :** learning disabilities,inclusion, community life,photovoice